

パナマの学校生活

現地の教育事情 < 小学校 >



成績が悪いとドンドン落第

我が3人の子供の末の娘は現地校に通っている。「ラ・サジェ」 パナマでは名門の私立校の一つ(国内の「ラサール」にあたる)。たまたま娘のクラスには現パナマ大統領の子息やボクシングの世界チャンピオンの子供が席を同じくしている。



朝7時10分前「ブー」との合図の警笛とともにスクールバスが家の前に止まる。授業の始まるのは7時15分。日本と比べれば大変に早い。終業時間も午後1時とこれまた早い。この間、6時間で6科目。土・日曜日は当然ながらクラスはない。

ただし、これは私立校でのこと。公立校の大部分は午前と午後の二部制となっている。校舎、設備の不足からくるものだが、教師も二つの学校を掛けもちしているケースがけっこうある。

授業の進め方は、日本のそれと大差はないようだが、教科の中に音楽がないのが少々気になる。それに運動会、学芸会、遠足といった学校行事が少ないこと、また生徒会、クラブ活動も日本で行われているようなものとなると、これも極めて限られてくる。これは国の教育方針、施設また担当教師の不足によるものだろうが、私の考える全体教育という観点からは少々物足りない気がしないでもない。

次に驚くべきは、宿題の多いこと、そして落第生の多いことである。この「落第」については、一般紙でも取り上げられ問題にされているが、成績が悪ければ小学生であっても容赦なく「落第」となる。また同じ学年を繰り返すのである。

年度末に成績表を家に持ち帰ってきた末の娘の第一声がふるっていた。

「ママ、私、落第しなくてよかったヨ！」

この一語から想像するに、子供たちは担任教師から「成績が悪いとどんどん落第するよ」と何度も言われたいたのではないかと思う。かといって娘の成績はそんなに悪いことはなく、全科目評価点の平均が4.2だったことからしてクラスでもまあまあの順位にいるはずだった(評価は5.4.3.2.1となっている)

ただ、同じクラス仲間と比べて彼女の場合、スペイン語のハンデがあったことは確かだ。その件で一度学校から呼び出しがあった。担任は30歳前後の既婚の女の先生(ちなみにパナマでは小学校教員の9割以上は女性である)。

学校の事務室となりの応接間。室外には次の面談希望の父兄が待っている。

「お宅の娘さん、数学や図工は大変よいがどうも国語(スペイン語)がまだ弱くてネ。それが社会や理科にも影響している・・・」

「ええ、家の中では日本語ばかり話しているものですから。で、どうでしょう。家庭教師を探そうと思っているんですが・・・」

「それは良いアイデアです」

「誰か適当な人を紹介していただけませんか」

「アッ、ソウ？ なんなら私が教えてもいいけれど・・・」

少したみかけるような調子で迫ってきた彼女に、“担任が自分のクラスの子の家庭教師なんて、日本だったら考えられない”と、私の心配を説明すると、彼女は「それでは」と隣のクラス担任を紹介してくれたのだった。学校をいくつもかけもっている先生もいることからすると、この程度は問題にならないのかもしれない。

さて、1月から3月いっぱい長期の夏休み。くだんの娘は、この期間に少なくとも同学年レベルの日本語に追いつこうと、今度は母親を家庭教師に、必死に「読み」「書き」に取り組んでいる。

中学・高等学校

遅しい建設への息吹き

ここ「インスティトゥット・コメルシアル・パナマ(パナマ商業高等学校)4年生の教室では、先ほどから理科の授業が行われている。女性教諭のボカネグラさんは、「基礎化学」のテキストを片手に、黒板に原子核の図解を描いている。32人の生徒の目がその指先を追っていく。

男子25人は半袖の白シャツに紺のネクタイ。女子の7人はこれも半袖の白シャツに紺のスカート。靴は全員が黒、靴下は青色と統一されている。

教師が黒板に向かっている間に、隣の生徒同士で雑談が始まった。どうもこれは世界共通の“現象”らしい。黒板から振り返ったボカネグラ教諭は、中央前列から3人目の生徒を指名した。

「さあ、ここに描かれた図解をもとに、教科書に書いてある内容を分かり易く説明してごらん」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

始業時間は早い。1時限の開始は朝7時。それから12時37分まで1時限が37分単位の授業が8時限ある。週休5日制。各科目間の休憩時間は2分。このうち1回のみは長く20分となっている。

終業時間も早い。これは、公立高校は午前と午後の2部制になっていることが多いからである。午後の部は12時50分から始まり、午前の部と同様の時間割の流れを持ちながら、6時半に終業する。

だから、午前の部が2300人、午後の部が1800人と、パナマ市内でも最も生徒数の多い学校の一つである同校の生徒の交替時間には、登校生と下校生で広い校内も生徒で覆い尽

くされた感となる。

小学校(6年制)が義務教育で、以後は中学と高校を合わせて6年、中学1年生から高校3年生までが同一校舎で学んでいる。したがって、ボカネグラ教諭が担当しているクラスは、日本で言えば、高校1年生に該当しているといえよう。

以上は公立の場合だが、私立となると状況がかなり異なってくる。大部分が1部制で時間的にもゆったりしている。

授業科目では、たとえば高1の場合、数学、国語(スペイン語)、英語、社会(歴史、地理)、理科(科学入門)、体操が中心となる。生徒にとって難しいのはやはり理数系の科目、つまり数学と物理や化学、であるようだ。

パナマでは小学校、中学校の時点から、成績が悪いとドンドン落第というシステムになっている。4科目以上が規定点に達していないと進級できないのである。

日本でいう「通知表」に記入される成績は、中間、期末試験の成績のほか、クラス内での授業、作業も評価の対象となる。そして上は5から下は1までの点があり(小数点までの刻みとなっている)、各科目とも3.0以上が合格、2.9以下が不合格となる。

この結果「高校では数学、物理、化学などで40%近い生徒が不合格になります。もっとも学年末に追試験があり、ここでかなりが救済されますがね」。ボカネグラ教諭は付け加えた。実際、落第生が多いのは国家的な懸案ともなっている。文部省もその解決策に頭を悩ませているのが現状のようだ。

一方、全科目の平均点が4.5以上の生徒は「クアドロ・デ・オノール(名誉の特待生)と呼ばれ、政府機関、各種社会団体、消防団ほかパナマ市内の全学校が参加する国家の独立記念のパレードでは、その象徴のたすきをかけて、誇らかに市中を行進するのである。

同時にこれらの生徒は、奨学金申請の特典も与えられる。そこでその栄誉を目指し、一生懸命に勉強に励む生徒がいる半面、前術のように落第生または3.0をぎりぎりを超え、やっと進級という生徒も多い。



高校生たちは、自由に青春を謳歌しているように見える。しかも、熱帯という気候のせいか、また女子の成熟度が日本より早いためか、はてはラテン・アメリカ的気質によるものか、高校生ともなると、男子も女子もノビア・ノビオ(女友達、男友達)がいるのがごく普通のようなのだ。

一面、運河の国パナマは発展途上にあり、公立の学校は多くが2部制、教室も教師も十分でなく、施設も粗末なものが多い。でもそこで学ぶ生徒の目は輝いており、国の未来を築いていこう、との建設の息吹きがあり、悪い環境にもめげない逞しさがある。

暴力、いじめ、無気力など、日本の社会が抱えている教育問題は、金満思想と飽食社会の落とし子のように思えてくる。

大学のキャンパス

ああ「ディア・リブレ」

2年前から国立パナマ大学の新聞学科に聴講生として席をおいている。私は聖教新聞の特派員としての活動のほか、パナマS G I (創価学会インタナショナル)の機関紙の編集も応援しており、ときに地元の一般紙への寄稿もする。スペイン語新聞の編集の基礎知識を得ることと、同時にスペイン語そのものを磨くためである。

大学は支局から車で5分、歩いて20分足らずのところにあるので、通学には便利が良い。週1回、火曜日の朝8時から2時間ほど。とはいえ、当然仕事が優先するので、やむを得ず欠席することもしばしば起きた。

したがって行かれる時は、せめて早めに行き、遅刻しないようにと、キャンパスに駆け込むようにしていた。ところが、息せき切って飛び込んだ教室には誰もいないケースにたびたびぶつかった。近くにたむろしている仲間の学生に問いただした。

「プロフェソール(教授)が来ていないから、たぶん授業はないんじゃない？」

つまり「休講」である。こんなときほどガクッと足の力が抜けることはない。8時とはいえ、南国の太陽はすでにキラキラと照りつけている。急に歩みを止めたはずみで、どっと噴出してくる汗を拭きながら、ヤレヤレとの思いである。

日本での私の大学(早稲田)時代にもやはり休講はあった。予習が十分にできていないときなどは、正直言って「ああ助かった」と友人と近くの喫茶店へしげこんだものである。無断休講はほとんどなく、その前のクラスるとき教授から直接予告されるか、当日、掲示板に秘書または事務職員の手で休講の告示が出たものだった。そもそも休講そのものがそれほどなかった。

ところが、ここではなんとなく休講が多い感じである。しかもそれが教室に入って初めてわかる。

「きょうは教授の××記念集会があるから」「明日は新入生歓迎のフィエスタ(祭典)だから」・・・。



6月×日。いつものように車を大学の駐車場にとめると急ぎ足で教室に駆け込んだ。と、だれもいない。どの部屋もガランとしている。キャンパスの芝生ではボリュームを上げたディスコのまわりで学生たちが歓談している。「休講」という話は事前にはまったく耳にしていない。

そこで、数冊の本とノートを小脇に、ガムをかみながら仲間とおしゃべり中のタンクトップの女子学生に声をかけた。

「アレ、あなた知らなかったの？きょうはディア・リブレよ。きのう選ばれたレイナが宣言したのヨ」

「ディア・リブレ」とはスペイン語で「自由の日」または「解放日」、つまり「授業のない日」

との意で「レイナ」とは「女王」のことである。

昨日の新生歓迎のフィエスタでミス文学・社会学部コンテストが行われた。そこで選ばれたミス、つまりレイナこと女王が「ディア・リブレ」を宣言したから、というのである。

“ ああ、何てことだ。たかが一女学生、レイナの一声で学部全体の授業がなくなるなんて ”

などと、まじめ一辺倒に考え、時間の浪費を嘆く自分などは、まだラテン・アメリカ気質になりきっていない証拠なのだ。教授たちさえもそれを当然の慣習と認め、むしろそれを楽しんでいるようにさえ思えるのである。

長い人生だ。何をあくせくする必要があるだろうか。大学生活だって同じこと。人生は楽しむためにある。まして今の若い間は この論理を身に付けられない限り、日本での大学生活と比べて大きなギャップと浪費感にさいなまれるかもしれない。

全市民に門戸を開放



パナマ運河の太平洋側

ところで、パナマ国立大学のよいところは、門戸が全市民に開放されていることである。当たり前といえばそれまでだが、いわゆる日本でいう高卒のほかビジネスマン、タクシー運転手、主婦と希望者は誰でも入ることができる。

競争率××倍と日本の振り落とすためにあるような厳しい入学試験はない。したがって、ここでは「受験勉強」とか「入試対策」あるいはもっと進んだ「浪人」などという言葉とは全く縁がないのである。

もちろん、本人の適性、講義を理解する能力という問題もあるので、不資格者には事前学習の機関の設置と簡単な適性学力テストが実施される。ともあれ、入学したい人は基本的には全員は入れると考えてよい。しかも授業料、入学金的なものも年間 40 ドル前後(1983 年)とほぼ無償に近い。

ただし、これが「卒業」となると状況が違ってくる。試験なしで入学したものの、能力不足で勉強についていけなかった、職場の環境が「時間的に許さなかった」等、さまざまな事情で最後まで続かないケースが多々あるからだ。

授業は朝 7 時から夜の 10 時まで、午前の部、午後の部、夜間の部と三部になっている。昼間のクラスにも、すでに職を持っている学生が多数おり、年齢構成は最も若い 18 歳から 20 代、40 代、50 代まで大きな広がりを見せている。私を含めて教授より年上の生徒もかなりいる。親しいクラスの友人のなかには、すでに本を著したこともある 50 歳を超えた現役の記者、政府交通局の裁判官、またドミニカから留学している 30 代の軍人もいる。

だから、どちらが教授でどちらが学生か区別のつかないこともしばしば起こる。こんな自分なども「外国からの交換教授」と“ 名誉ある間違い”を受けたこともたびたびあった。もっとも、一度は私も担当の教授に請われて 40 人ほどのクラスで日パ新聞比較論なるものを

話したことがある。

日本の新聞の編集方針。レイアウトのあり方。中央紙と地方紙およびその発行部数。そして言論、報道の自由といったテーマについてであった。

そのなかでは、日本の各紙の発行部数の多さ(人口 200 万余のパナマからすれば、いくつもの中央紙がその数を超えている)、テレビ、ラジオ、週刊誌を交えしのぎを削った取材競争、言論出版のほぼ完全な自由が特に学生仲間の関心を呼んだ。

ちなみに、パナマの新聞は全国紙でも発行部数は 10 万には届かない。しかもぎりぎり××字までのニュースを翌朝版にぶち込むといった競争はあまりない。したがって「抜いた、抜かれた」とか「夜うち、朝がけ」などという記者という職業柄に独特なニュアンスもない。先に触れた“アスタ・マニャーナ(あしたまた)”のラテン・アメリカ的特質が「時」を争う新聞のなかにも映り出ているようだ。

パナマ大学のキャンパス内には「光に向かって」とのタイトルが刻まれた盲人の像がある。目に見えぬなかで手探りで人類の英知を求めゆく学徒の姿勢を示唆しているのであろう。ここから知性の光があふれ、世界の平和と市民に貢献していく人材が陸続と育ててほしいと願わずにはいられない。